

## 平城京右京八条三坊 「古和同」銭の分析

和同開珎には謎が多い。通説は初鑄を和銅元年(708)、廃止を、万年通宝(760)・神功開宝(765)の発行と説くが、平城京左京三条四坊七坪鑄銭遺跡の発見によって、以後も鑄造が続くことが判明した(奈文研1975)。さらに、和同銭の鑄造所は左京三条四坊や枝銭がある大阪市細工谷遺跡、銭范がある周防鑄銭所に加え、史料にみえる岡田鑄銭司等多数がある。これらは、和同銭の成分組成に微妙に影響するであろう。

和同銭の成分分析は青銅成分の錫(Sn)と鉛(Pb)の比率に注目することから始まる。『平城宮発掘調査報告Ⅵ』は8世紀のある段階から錫の含有量が低下し、鉛と交代するとし、成分の違いを年代差とした。その後、重点はアンチモン(Sb)、ビスマス(Bi)、砒素(As)など微量成分に移るが(『日本出土青銅器の材質分析による編年研究』1988)、解釈の基調は変わらない。

微量成分のうち8世紀初頭、あるいはそれ以前に遡る可能性があるのが、輝安鉱( $Sb_2S_3$ )を原料とするアンチモンである。これは8世紀初期の鏡やいわゆる富本銭、和同銭の一部に含まれる。富本銭の場合、その量は右京八条一坊例で11.9wt%に達する(非破壊測定、以下同)。富本銭の鑄造年代は明日香村飛鳥池遺跡の調査によって、7世紀後半の天武期と判明した。これに関して興味深いのが、書紀文武2年(698)6月条。伊予(愛媛県)での白銀(錫の別称)産出記事がある。愛媛県に錫鉱山はないが、アンチモンで世界的な市の川鉱山があって、この「白銀」はアンチモンを指すという。

次の問題はアンチモンを含む和同銭の年代。藤原京右京七条一坊の和同銭は、錫が0.3wt%と微かであるがアンチモンを6.6wt%含む。和同銭には古和同と新和同の2種

がある。和同「開」珎の「開」の門構のあり方から大別し、閉じるものを不隸開和同(古和同)、開くものを隸開和同とし、後者のうち闕縁、背広郭などを古和同に含め、他を新和同とする。

藤原京例は闕縁、背広郭の隸開和同で、古和同に属する。年代は遺構から7世紀末～8世紀初頭(奈文研1996)。

他方、平城京発見の新和同は、大半がアンチモンを含まない。これが確かなら、その有無は和同銭の新古の指標となる。この検証には類例を増す必要がある。今回は大和郡山市調査の「古和同」銭5点と、左京一条三坊SD650の古和同(登録番号No.280、以下同じ)、同遺構の新和同(No.208)、左京八条三坊の新和同(No.337)を分析した。大和郡山市例は右京八条三坊三坪の胞衣壺納入品で不隸開和同とする。胞衣壺は8世紀後半(郡山市1993)。左京一条三坊の古和同No.280は不隸開和同、No.208・337はアンチモンを含む新和同。測定条件は次の通り。

エネルギー分散型蛍光X線分析装置 波長分散型蛍光X線分析装置  
45kV、0.3mA、1.0mm、500sec 50kV、50mA、1deg/min、1.5cm

大和郡山市例は錆化が激しい。X線撮影の結果、K-2(報告No.)を除く2点は隸開和同と判明。報告は誤りである。全て砒素(As)、鉛(Pb)、錫(Sn)を含み、K-1以外は鉛が多い。K-1は錫を8.5wt%含む。K-2が古和同か否か猶、検討中。従来の成果も含めると、アンチモンと錫を合金成分とする和同銭は次の2類型に分かれる。

I a: アンチモン(Sb) + ビスマス(Bi)、銀(Ag)、錫(Sn)

b: アンチモン(Sb) + 砒素(As)、鉛(Pb)

II a: 錫(Sn)

b: 錫(Sn) + 砒素(As)、鉛(Pb)

古和同No.280はI a型、新和同No.208・No.337はI b型となる。前者は富本銭に近く、7世紀的特徴を示す。後者はこれや他の銭を原材料としたのであろうか。

(金子裕之・肥塚隆保/埋蔵文化財センター)